

2020年度福祉経営学部社会福祉士養成課程の 「相談援助実習」代替措置に係る取組み

－新型コロナウイルス感染症拡大状況下のWeb実習の取組み－

日本福祉大学 福祉経営学部（通信教育） 社会福祉士養成教育担当 上山崎 悦 代

I. はじめに

福祉経営学部（通信教育）は、4年次に「相談援助実習」を配当し、例年700名前後の実習生を全国の実習施設に配属している。

2020年度については、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、学部内で熟慮を重ねた結果、2020年4月に「配属」による実習を取りやめ、代替実習への切り替えを決定した。

ここに至る背景としては、本学部実習生並びに実習施設利用者の生命と安全を守ることという方針、並びに、4月3日付の「一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟」（以下、ソ教連）の「会長声明」¹によるところが大きい。特に、本学部実習生の特徴（①社会人学生であること、②福祉・医療現場の第一線で勤務している学生が多数いること、③新型コロナウイルス感染症の流行地を含めた全国に学生が所在していること等）を鑑み、4月の早い段階でこの方針を決定した。

代替実習の実施にあたりまず行ったことは、学部内でのプロジェクトチームを結成したことである。チームは実習主任（山本克彦教授）を中心に、実習・演習教育委員長（明星智美准教授）、社会福祉士実習を主に検討する「社会福祉士グループ」の2019年度・2020年度の議長（中島民恵子准教授、鷺野明美准教授、上山崎悦代講師）を合わせた5名で構成した。このチームを中心として、具体的な学内実習の教育プログラムの構築や、変更に伴う各種文書、実習生向け通知、案内などの業務整理などを行っている（図1）。

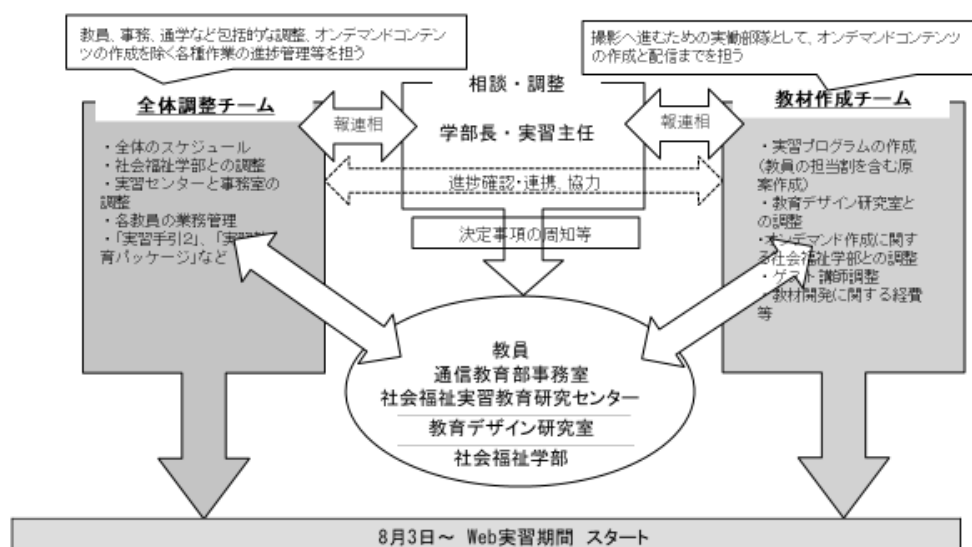


図1 Web実習に向けたプロジェクトチームの概要

代替実習は、本学部が通常行っているオンラインを活用したものとするものとしたことから、「Web実習」と呼称することとなった。実習に関わるステークホルダー（実習生、実習指導担当教員（常勤、非常勤）、巡回指導担当教員（非常勤）、実習関係事務職員等）においては、すべて「Web実習」の用語で統一しており、本稿でも「Web実習」と表記する。

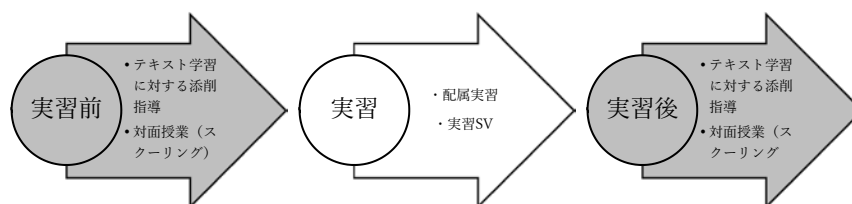
Ⅱ. 実習前における実習生対応と実習前教育

現場への配属実習を行わないことを決定したのち、速やかに実習生へその旨を通知した（第1報通知）。当時、実習生からの「実習はどうなるのか」「職場から大学に問い合わせるように言われている」「今後の見通しが不安」といった声も多く、大学の方針を出来るだけ速やかに通知するという学部の方針に沿った形で通知をしている。その後も、学部としての方針が詳細に決まっていく段階に応じ、複数回にわたって、実習に関する学生向け一斉通知をおこなった（第2報通知、第3報通知）。

また、本学部において、「相談援助実習」は「相談援助実習指導Ⅱ」（以下、指導Ⅱ）と同時履修が必要となっており、細かな学生への指導は、指導Ⅱクラス担当教員の下で実施した。指導Ⅱクラス担当教員は、実習前、実習中、実習後の1年間に渡って指導を行うため、実習に関する学生の質問等には、クラス担当教員を中心に対応した。非常勤講師がクラス担当教員である場合は、代わりに本学部所属教員もサポートするなど、きめ細やかな対応を心掛けた。

なお、指導Ⅱでは、「実習前（前期）4講」「実習後（後期）4講」の計8講分について、面接授業（以下、スクーリング）を実施している。2020年度の実習前教育については、ちょうど緊急事態宣言後すぐの時期とも重なったこともあり、スクーリングを開催できる状況にないと判断したため、スクーリングに代わるものとして、「オンデマンド型」の授業を展開した。また、オンデマンド型による、教員から実習生への「一方通行」講義とならないよう、実習生に対してオンデマンド視聴後の「確認レポート」提出を課した。クラス担当教員がこれに添削指導を行うことで、相互的な教育を行った。

● 通常の実習前・実習・実習後教育



● Web 実習における実習前・実習・実習後教育



※色がついている箇所が「指導Ⅱ」の教育内容

図2 実習前・実習・実習後の教育内容

Ⅲ. Web実習の対象者と実習期間

前述の実習前教育を経て、実際に「Web実習」の対象者となった実習生は657名である。実習期間は2020年8月3日から11月13日である。本学部の実習形態は、24日間の実習を連続して行う「集中型」を基本としつつ、一部は、24日間の実習日程がひと月以上に分散する「分散型」となっている。そのことを鑑み、Web実習においても、原則「集中型」としつつ、一部は「分散型」で実施できる体制を整えた。

Web実習の特徴としては、6実習日を「一つのフェーズ」と捉え、24日間の実習を4フェーズに区分けする形を取ったことである。この「フェーズ」の考えをベースとして、実習プログラム全体を設計した（表1）。

表1

実習期間：8月3日～11月13日

第1フェーズ	1～6日目
第2フェーズ	7～12日目
第3フェーズ	13～18日目
第4フェーズ	19～24日目

Ⅳ. Web実習の構造

Web実習は、配属実習に代わる内容を含む教育教材をオンデマンドで配信し、さらに実習生の主体的な取り組みを促進する課題を与えることで、可能な限り実習に近くような「体験型教材」となるよう工夫した。

具体的には、厚生労働省「相談援助実習の目標と内容」及び本学部シラバスに沿って、「1日7.5時間×24日間＝合計180時間」以上となる教育プログラムを開発し、提供した。通常の配属実習同様、「3段階実習」を基本に、1週目〈第1フェーズ＝職場実習〉、2週目〈第2フェーズ＝職種実習〉、3／4週目〈第3／4フェーズ＝ソーシャルワーク実習〉を念頭に組み立てた。

（1）全体の枠組み

Web実習における「実習1日」の流れは図3のとおりである。

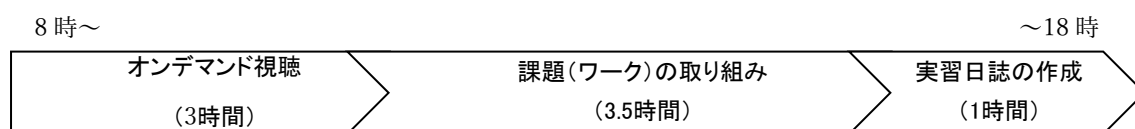


図3 Web実習における「実習1日」の流れ

1日あたりの実習時間は、本学部の配属実習同様、1日7.5時間である。その内訳は、①オンデマンド視聴（3時間）、②課題学習の取り組み（3.5時間）、実習日誌の作成（1時間）とした。

（2）実習生・クラス担当教員・巡回指導教員の役割

Web実習における実習生、クラス担当教員、巡回指導教員²の役割は表2のとおりである。実習生は、所定の実習日毎にオンデマンドを視聴し、その内容を踏まえて、「課題（ワーク）」と「実習日誌」を作成する。そ

して、1つのフェーズが終了するごとに、1フェーズ・6日分の「課題（ワーク）」と「実習日誌」を大学に提出し、次のフェーズに進むという流れで取り組んだ。

クラス担当教員は実習中、提出された「課題（ワーク）」並びに「実習日誌」の提出管理と添削指導を実施した。添削指導は、個々の実習生の実習進捗に合わせ、出来るだけ速やかに実施することで、実習の成果や課題に対するフィードバックを行った。

巡回指導教員は、実習生に対する個別スーパービジョンを実施した。通常の配属実習の場合、実習中2回の実習スーパービジョンを実施しているが、今回のWeb実習期間中においては、3回の実習スーパービジョンを担った。「実習日誌」などを素材にした実習スーパービジョンは、眼前に実習指導者がいない中でWeb実習に取り組む実習生にとって、大きな支えになっていた。

Web実習を行うにあたり、特に重視したことはクラス担当教員と実習指導講師（巡回指導教員）との連携である。通常の実習においても二者連携は不可欠であるが、Web実習においては特段その意味が大きい。クラス担当教員と実習指導講師（巡回指導教員）は常にメール等でやり取りするとともに、実習生が実習指導講師に連絡をする際は、必ずクラス担当教員にも同報するよう、指導徹底した。

表2 Web実習における実習生、クラス担当教員、巡回指導教員の役割

フェーズ	実習生の役割	クラス担当教員の役割	巡回指導教員の役割
1	毎実習日に、①オンデマンド視聴、②課題（ワーク）③実習日誌の3つを行い、フェーズ終了ごとに、①、②を大学へ提出	随時指導、課題の提出管理、課題添削等	
2	同上	同上	第1フェーズに関するSV
3	同上	同上	第2フェーズに関するSV
4	同上	同上 実習期間終了後、第4フェーズを含む全体のSV	第3フェーズに関するSV

（3）Web実習の留意点と工夫

通常配属実習に相当する教育効果を担保するWeb実習とするため、構造上の詳細を詰めるとともに、留意点と工夫を重ねた。

具体的には、本学部の強みでもある、既存のオンライン学習システム（nfu.jpシステム）を全面的に活用する形で、①実習日登録情報の一括管理、②オンデマンドの不正視聴（早送りなど）の防止管理、③オンデマンド視聴状況の記録管理、④課題（ワーク）と実習日誌の提出管理等を講じた。

V. 実習プログラムの作成と展開

（1）実習プログラム作成のプロセス

実習プログラムの大枠は、前述のプロジェクトチームを中心に構想を練った。「一つの施設種別で120時間以上実習する」という要件を確保しつつ、実習事前学習の多様性³も想定した内容を検討した。

その結果、高齢者福祉関係を主体とするA社会福祉法人を設定し、当該法人が運営する「老人デイサービスセンター」（老人福祉法第二十条の二の二に規定）での実習を想定したプログラムとした。さらに、多様な学びを促進するために、同法人は、旧孤児院を源流としながら多様な事業展開を行っている中規模社会福祉法人と想定し、実習プログラムには「児童養護施設」、「特別養護老人ホーム」、「地域包括支援センター」、「障害者福祉事業所」を含めた。加えて、法人内施設に留まらず、連携している「医療機関」を入れ、オンデマンドの内容には、社会福祉協議会などの内容を包含することで、幅広くソーシャルワークを学べるよう工夫した（表3）。

表3 Web実習プログラム（例：第1フェーズ）

第1フェーズ					配信開始：2020年8月3日 08:00	
日にち	段階	場面	福祉経営学 部評価項目	課題（ねらい）	実習内容（オンデマンド教材）	
1日目	職場	法人 (老人デ イサービ スセン ター)	(15) (16) (17) (18) (19)	[2] [6]	①Web実習の実習の全体像を理解し、学習目標を立てることができる。 ②法人理念を具現化するためのプロセスを学ぶ。	①実習オリエンテーション（講義） ・24日間の実習の構成（実習生が取り組むこと、取り組みにおける留意点） ・本実習におけるスーパービジョン体制 ②実習施設（法人の全体像）に関する講義 ・法人の沿革、理念、組織・職員体制 ・法人内の事業所
2日目	職場	法人 (老人デ イサービ スセン ター)	(16) (17)	[5]	①実習施設における管理運営業務・体制を説明することができる。	①実習施設（法人）におけるソーシャルアドミニストレーションの講義と演習 ・社会福祉法人における運営管理 ・社会福祉法人における財務管理 ・法人や施設内の各種委員会の運営 ・リスク管理 ・サービスの質評価 ・サービスマネジメント
3日目	職場	老人デ イサービ スセン ター	(1) (2) (3) (11) (17)	[1] [2] [3] [4]	・老人デイサービスセンターの概要を理解する。 ・利用者との適切なコミュニケーションを展開することができる。	①老人デイサービスセンターの利用者に関する講義 ・老人デイサービスセンターの利用者像・利用者の特性 ②実習施設（老人デイサービスセンター）の位置づけや社会的役割に関する講義 ・社会との関係・利用者本人への支援 ・家族等への支援 ③利用者（高齢者）とのコミュニケーション技術に関する講義と演習 ④実習施設における（老人デイサービスセンター）の多様な職種に関する講義 ・生活相談員の業務・介護職員の業務と役割・看護職員の業務と役割 ⑤他職種によるチームアプローチに関する講義
4日目	職場	居宅介護 支援事業 所	(1) (2) (3) (5) (6) (11) (13) (17)	[1] [2] [3] [7] [13] [14]	①居宅介護支援事業所の法的位置づけ（介護保険法との関連）を踏まえ、居宅介護支援事業所の役割と実際の業務内容を理解する。 ②ケアマネジメントの具体的な展開方法と老人デイサービスセンター等との連携方法を理解する。 ③ソーシャルワークの視点から踏まえたケアマネジメントの展開方法（含む、ケアプランの立案）を理解する。	①居宅介護支援事業所の役割と業務内容に関する講義 ・居宅介護支援事業所の法的位置づけの講義 ・ケアマネとして展開しておくべき法制度（介護保険等）の講義 ・居宅介護支援事業所の役割と実際の業務の流れ ②ケアマネジメントの展開方法に関する講義 ・ケアプランの立案手順・方法 ③ケアマネジメントの具体的な展開と老人デイサービスセンター等との連携に関する講義
5日目	職場	障害福祉 事業所	(1) (2) (3) (4) (5) (6) (11) (13) (17)	[1] [2] [3] [7] [14]	①法人が運営する障がい福祉事業の役割と業務内容に関する講義 ②各施設・事業におけるソーシャルワークの特徴や具体的な取り組みを理解する。 ③利用者の障害特性に合わせた支援の方法や工夫を理解する。	①法人が運営する障がい福祉事業の役割と業務内容に関する講義 ・障害者支援施設 ・生活介護 ・就労移行支援事業 ・就労継続支援（B型）事業 ・福祉支援事業 ②当該施設種別の特徴と利用者像に関する講義と演習 ・障害特性に合わせた支援の重要性 ・障害特性に合わせた支援の方法・工夫 ③当該施設が取り組むソーシャルワーク（特に、メゾ、マクロレベルの支援）に関する講義
6日目	職場	児童養護 施設	(1) (2) (3) (5) (6) (11) (13) (17)	[1] [2] [3] [7] [13] [14]	①児童養護施設の意義（社会的養護の意義を含む）とファミリー・ソーシャルワークの役割を学ぶ。 ②虐待対応の視点からの人権擁護活動や虐待児童等に対する支援活動を理解する。	①社会的養護の意義と児童養護施設を取り巻く変化に関する講義 ②児童養護施設の職員体制に関する講義 ③児童養護施設の子どもの生活と職員の業務に関する講義 ④児童養護施設退所者へのインタビュー ⑤子どもの権利と児童養護施設におけるソーシャルワークに関する講義

（注）第2フェーズの実習場面は「老人デイサービスセンター」、第3フェーズは「特別養護老人ホーム」「医療機関」「地域包括支援センター」、第4フェーズは「老人デイサービスセンター」となっている。

各実習日の具体的な内容については、24日間のうち16日分を本学部教員が担当することとし、8日分は、社会福祉学部の実習担当教員が作成した。この学部間協働に関しては、社会福祉実習教育研究センターの運営委員（保正教授、浅原准教授）を中心に、随時対話を重ねて実現したところが大きい。

（2）オンデマンド及び課題（ワーク）の作成プロセス

実習プログラム完成後は、これを基盤として、実際に実習生が視聴する「オンデマンド」と、これに関連する「課題（ワーク）」の作成に取り組んだ。

本学部では、所属する全ての教員がこの作成プロセスに関与し、まさに「オール教員」体制で対応した。具体的には、1実習日につき、1名もしくは2名の担当教員制を敷き、責任を持って当該実習日の教育コンテンツを完成させた。また、フェーズごと、あるいは、実習施設種別ごとにまとまりがあるものとなるよう、同じフェーズや実習施設種の教員同士が連携し、協働しながらコンテンツを作成するなど各所で工夫を凝らした。

作成までの流れとしては、①各教員が「オンデマンド」の具体的な内容を検討する、②「課題（ワーク）」の作成の中身を検討する、という2ステップである。

まず、「オンデマンド」に関しては、学部教員が導入講義などを担当しつつ、学部教員だけでなく、多種多様な実習施設の方に登場いただいた。これは、本学部のWeb実習の趣旨に賛同いただいた実践現場の皆さまが、Web上であってもリアルな実習に遜色ない学びを提供したいという思いを持って、実に多くの学びを提供くださった結果といえる。平時の実習での学びにおける「実習生としての学びのあり方」に関することはもちろん、新型コロナウイルス感染症が拡大している昨今においてどのような工夫をされているのか等も含め、現場のリアルな実習場面を想定した内容を届けてくださった。さらには、実習施設の利用者や元利用者にも登場いただくことができた。このようなご協力があった、まさに「リアルな声」をそのまま、オンデマンドの中で展開することができた。

「課題（ワーク）」については、オンデマンドの中身を応用発展させる形で内容の設計にあたった。全体の統一感を持たせるために、分量については、一定の制限を付けた。課題の中身も多様にわたり、オンデマンドの内容に関する考察を求めるものや、個別支援計画の作成、実習全体のまとめのプレゼンテーション等があった。

オンデマンドの作成、特段、映像コンテンツに仕上げるうえでの撮影やその後の修正等、その全般にわたり、「教育デザイン研究室」のスタッフによる強力なサポートを受けた。また、作成プロセス全体にわたって、通信教育部事務室の各部局に対する細やかなマネジメントに支えられた。まさに、教育職員、事務職員の力を総動員することで、実習プログラムが完成したといえる。

（3）Web実習の展開

8月3日に実習1日目のオンデマンドを配信した。初日のオンデマンドの内容は、イントロダクションとして、Web実習の全体像に対する理解を促す内容等で構成した。また、課題（ワーク）では、「Web実習」用の「実習計画書」を立案する内容とした。

初配信となった日は、一部の視聴トラブルも見られ、その都度個別に対応した。第1フェーズの配信が完了するまでの6日間は、若干のトラブルが見受けられたが、少しずつ修正を重ねたことで、第2フェーズの開始日以降は、安定的な配信となった。課題（ワーク）に関してはトラブル等の発生はなかった。一部、誤植などが発生した際は、その都度対応し、問題なく経過した。オンデマンド視聴、課題（ワーク）の提出も含め、11月13日に実習期間が終了した。

VI. Web実習の評価

(1) 実習後における実習生対応と実習後教育

実習期間終了後の実習生対応としては、後期のスクーリングに向けた案内、学習課題の添削指導、再実習の指示などを行った。

後期スクーリングについては、図2で示したように、「オンライン授業」で実施することとした。2年間に渡る実習教育の総括的位置づけでもあるスクーリングということもあり、出来るだけ対面型の授業を追求し検討を重ねたものの、新型コロナウイルス感染症のさらなる拡大が生じていたことを鑑み、オンライン形式の授業とした。前期スクーリングがオンデマンド型であったことに比較すると、リアルタイムのオンライン形式授業となったことで、実習生同士、あるいは、実習生と教員との相互性・多面性を確保できたと考えられる。

また、オンデマンドの視聴記録を確認し、不備があると考えられる実習生に対しては、「再実習」を求めるなど、適切な実習が完了していることを確認した。

(2) Web実習の評価

指導Ⅱを担当する教員で構成している「社会福祉士グループ」教員会議、並びに「実習・演習教育委員会」では、随時、Web実習に関する意見を集約した。

その中で出されたものとしては、実習プログラムの特性を生かして多角的な学びを形成できているとの意見があった一方で、課題（ワーク）が過重であったこと、孤独な学びの中で実習生の精神的な負担が大きかった様子等が課題として挙げられた。これらのことも踏まえ、指導Ⅱ「後期スクーリング」終了後、実習生に対するアンケート調査を行った。

1) アンケート調査の概要

本調査の目的は、Web実習の成果や課題を抽出し、次年度以降の教育に活用することである。加えて、ICTを活用した巡回指導に関する実態を把握することを企図した。

調査対象は、2020年度「相談援助実習」を終了した者602名で、Googleフォームを用いたWeb調査とした。倫理的配慮として、調査対象者に対し、本調査では個人情報特定されないことや成績評価に影響しないこと、結果について統計的に処理して関係機関に公表することを示し、これに同意した場合に限り回答を求めた。

2) 結果の概要

調査項目は、実習形態（実習が1か月以内で完了する集中型とそれ以外の2種類）や予定されていた施設種別を確認したうえで、各フェーズでの「学びの深まり」を問うた。また、本学部の実習評価項目（15項目）を説明変数として、各項目の学びの深度や実習スーパービジョンの成果などを確認した。その他、実習中の不安や心配事に対するサポート体制、及び、実習全体を通しての「オンデマンド」及び「課題（ワーク）」における学びの深まりについて問うた。

ここでは、「オンデマンド」及び「課題（ワーク）」における学びの深まりの2点について述べる。

1) オンデマンド視聴での学びの成果

本項目に回答のあった328人のうち、309名（94.2%）が「とても成果があった」「まあ成果があった」と回答した（図4）。その理由として、幅広い種別を学ぶことができたこと、現場の方の話がためになった等が挙

げられた。一方で、実際に施設での学びに比較してどうしても物足りなさを感じる等の意見も多く挙げられた。

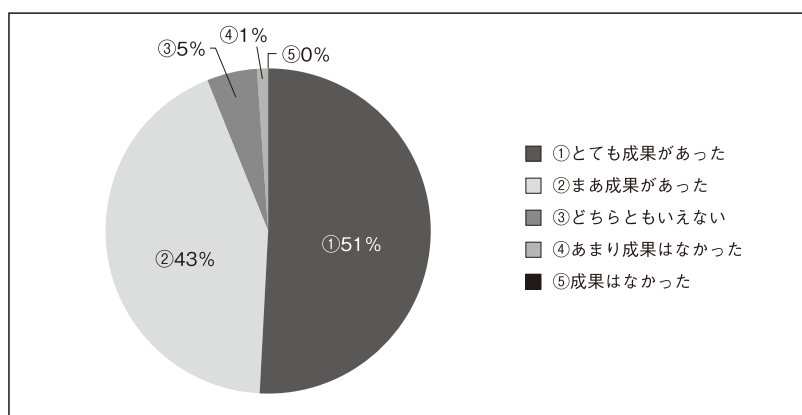


図4 Web実習（オンデマンド視聴）での学びの成果

2) 課題（ワーク）での学びの成果

前項目同様、328人から回答があり、292名（89.0%）が「とても成果があった」「まあ成果があった」と回答した（図5）。

その理由として、知識面での学びが深まったことや、課題を通して多角的に考えることに繋がったという意見がある一方、課題の量が多く、課題をこなすことに精一杯になったなど、孤独な中で多くの課題に向き合う実習生の姿が浮き彫りになった。

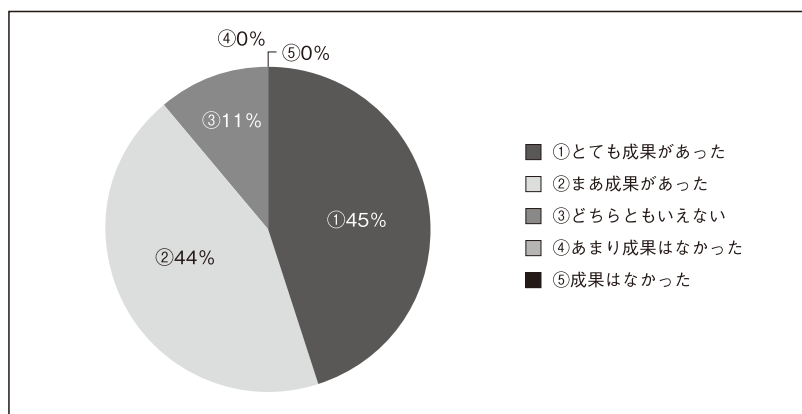


図5 Web実習（課題ワーク）での学びの成果

3) Web実習全体の満足度

Web実習全体の満足度としては、328名中「とても満足」「満足」と回答したのは、283名（86.3%）となっていた（図6）。

理由を問う記述からは、「Webで本当に学べるのか不安だった」「慣れるまで時間がかかった」といった声がある一方、「充実した内容だった」「今までで一番勉強したと思う」と言った回答もあった。中には、急な実習形態の変更にも関わらず、様々協力くださった福祉現場の職員の方への謝辞や教員に対する労いなどのコメントも見受けられた。

本項目の自由記述は、まさに実習生の「生の声」であると考えられる。そこからは、一人パソコンやタブレットの前でオンデマンドや課題（ワーク）に向き合いながら、黙々と実習に取り組む姿や、巡回指導教員のスーパービジョンを受けながら自らの学びを整理し、丁寧に振り返った姿が見て取れる。また、少なからず「実際に利用者と関わりたかった」「現場に出ていないので不安」との意見もあり、現場のリアリティを体感できなかったことへの不安や戸惑いが多かったことも推察される。この点は、Web実習の大きな限界だったといえるだろう。

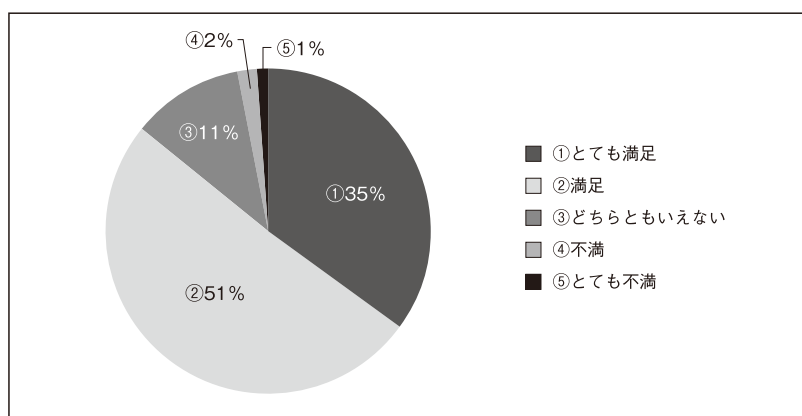


図6 Web実習全体の満足度

VII. 今後の課題

新型コロナウイルス感染症の拡大という未曾有の事態に直面し、社会全体が大きな影響を受けた。本学実習教育についても、そのあり方を見直す大きな契機になった。

2020年度実習は、手探りの状況のもとオール教員体制で臨んだ。そのことは、学部内での意思決定を丁寧に取り組むことの大切さを改めて痛感する機会ともなり、さらには、多くの教員が支えあうことで困難を乗り越えられること、その可能性を実感することにもつながった。

一方で課題も多く残った。限られた時間の中で意思決定を進めていく難しさはもちろん、想定外の状況が生じた場合、前例のない中で、最適解を見つけていくことの困難さもあった。また、日々をやり過ごすことに精一杯になる状況下、十分な振り返りがやり切れていないということもあるだろう。

2021年度の社会情勢は不安定な様相が続く。2020年度に続きWeb実習を実施することの可能性も視野に入れながら、今回の反省を踏まえ、よりよいソーシャルワーカー養成教育に資するよう努力を重ねたい。

最後に、Web実習では多くの方にご協力いただいた。大学関係教職員はもちろん、オンデマンドには、コロナ禍の中、利用者の暮らしを支えるソーシャルワーカーとして第一線でご活躍の現場職員の方に多く登場いただいた。専門職だけでなく、利用者の方やご家族の皆様にもご協力いただいている。

ここに改めて深謝申し上げます。

- 1 「ソーシャルワーク支援を必要とする利用者の生命を第一義に考え、利用者の権利と最善の利益を守るため、当面本年6月末日まで、実習先となる社会福祉施設・医療機関等の実習受入れに関する意向にかかわらず、学生の実習実施を見合わせることを、本連盟から会員校に願う」
- 2 実習巡回指導は、本学部専任教員が担うだけではなく、一部を「実習指導講師」に委嘱している。実習指導講

師は、全国の各地域において、福祉等現場の第一線でソーシャルワークを担う現任者等で構成されており、質の高い実習スーパービジョン体制を構築するうえで、強力なサポートをいただいている。

- 3 実習生は、実習前年度より、それぞれの「実習施設種別」に合わせて学習をしている。2020年度実習生の場合、従来の配属実習施設種別は36にわたっていた。そのため、主となる施設種別を想定しつつも、実習生の多様な学びにある程度対応できるよう工夫した。